

# 日本人英語教師の英語観

## —「国際語としての英語」を中心として—

東京都／立教大学大学院在籍 行森 まさみ

### 概要

本研究では、日本人英語教師の「国際語としての英語」に対する意識とそれを構成する要因を検証し、教師の英語観の実態を明らかにすることを目的としてアンケート調査を行った。調査協力者は288名の高校教師で、t検定と探索的因子分析を用いて結果分析を行ったところ、英語でのコミュニケーション実践において、NSにより強い意識を置いていることがわかった。その理由を表す英語観には、規範主義や英語圏への文化的関心、英語への言語学的関心、英語教育の知識志向および実用志向があることが明らかになった。自由記述回答では、実用性を重視する近年の英語教育の傾向が過度に進むことへの懸念も見られ、学校という場における英語教育のあり方を問うものもあった。そのような立場からすると、NNSとして、NSだけではなく、より広くNNSとのコミュニケーションをも意識した「国際語としての英語」という概念は、実用主義を単に強化するものとしてとらえられる可能性が示唆された。

## 1

### はじめに

英語の非母語話者（ノンネイティブスピーカー：NNS）人口は今や母語話者（ネイティブスピーカー：NS）人口を上回り、NNS同士のコミュニケーションを想定した英語の国際的実利性が認識され始めて久しい。「国際語としての英語」という概念においては、英語はもはやそれを母語として話すNSだけの言語にとどまらず、NNSにもその所有権（ownership）があると考えられている。これまで

日本の英語教育では、英米語を知識として習得することを重視した教育がなされてきたことは否めない。しかし、近年のコミュニケーション力育成にも重点を置いた英語習得へのシフトチェンジにおいて、NS英語を迫従するだけの教育ではなく、英語学習者も日本人教師自らもNNSとして「国際語としての英語」を使うことが必然となり、英語の多様性への寛容な態度を求められるようになってきた。日野（2001, p.277）は、「自らの英語を含め、諸英語変種に対する偏見のない公平な態度は、国際英語によるコミュニケーションを成功させるための基本的な要素」と述べている。

しかしながら、日本人の英語変種に対する言語態度は英米語に対しては好意的である一方で、インド英語などの地域変種や日本人が話す英語には否定的であり、寛容度が低いという研究結果が報告されている（Chiba, Matsuura, & Yamamoto, 1995; Matsuda, 2003; 花元, 2010; Tanaka, 2010）。さらに、Jenkins（2007）は数か国のNNS英語教師を対象に調査し、NS英語を偏重する言語態度の特異性について指摘した上で、英米語を最高の目標レベルととらえ、NNS英語をそれより簡素化して劣ったものと認識しているとした。教師の信条は学習者に大きな影響を及ぼすものであり、日本人の「国際語としての英語」の実践を考える上で重要な問題であると言える。

## 2

### 研究の目的

本研究では、日本人英語教師の「国際語としての

英語」に対する意識とそれを構成する要因を検証し、教師の英語観の実態を明らかにすることを目的とする。本研究が提起する問題が、真の国際化への対応を求められる現場の英語教師の一助となることを期待するものである。

以下のリサーチクエストション (RQ) を設定し、調査する。

RQ1: 英語でのコミュニケーション実践において、NS 英語と NNS 英語に対する意識の違いはあるのか。

RQ2: 教師の英語観を構成する要素にはどのようなものがあるのか。

## 3 調査方法

### 3.1 手順

教師の英語観の諸相を明らかにするため、質問紙によるアンケート調査を行うこととした。まず、質問紙を作成し、75名の大学生の協力を得てパイロット調査を実施した(質問の表現は学生に合わせたものに調整した)。いくつかの質問項目から構成される下位尺度を検討し、クロンバック $\alpha$ 係数の算出をすることによって内的整合性を検証した。その結果、どの下位尺度にも関連のない項目の削除や、質問の意図が不明瞭な点、わかりにくい表現を調整した。次に本調査として、作成した質問紙を北海道・東北・関東・関西・九州地域の100校(国公立校75校、私立校25校)の高等学校に郵送し、回答の依頼をした。英語科教員配置数を考慮し、国公立校には1校当たり10人分、私立校には1校当たり15人分の質問紙を同封し、計1,125人分の回答依頼をした結果、290名の先生方の協力を得ることができた。うち、回答に不備があったものを除き、有効回答を288とした。回収率は25.8%であった。

### 3.2 質問紙

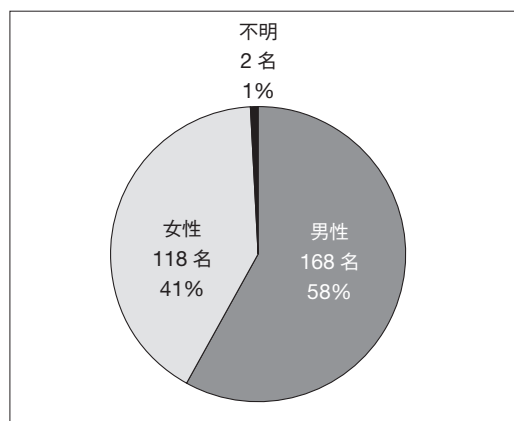
質問紙を作成するにあたり、Jenkins (2007)、および Mimatsu (2011) を参考にした。いずれも「国際語としての英語」の観点から見た教師の英語観を調査したものであり、前者は世界数か国の英語教師のNS 英語、NNS 英語に対する態度、後者は日本人英語教師の「国際語としての英語」に対する認識についての調査である。また、教師の認知、意識、

信条についての調査である Kindsvatter, Wilen, and Ishler (1988)、笹島・ボーグ (2009) も参照した。前者は教師が抱く信条の要因を検証したもので、教師の信条には「学習者としての経験、成功体験、確立した習慣、個人的要因、教育学等に基づいた原理」が関係しているとしている。また、後者は言語学習者の信条を計測する BALLI を改定した日本人英語教師の認知調査である。

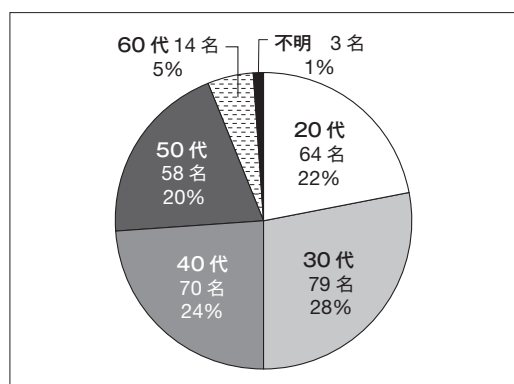
アンケート質問紙の回答は5件法で、質問は62項目作成したが、パイロット調査結果から最終的に57項目とした。質問紙の最後には、国際語としての英語についてどう考えるかを自由記述形式で質問した。

### 3.3 調査協力者

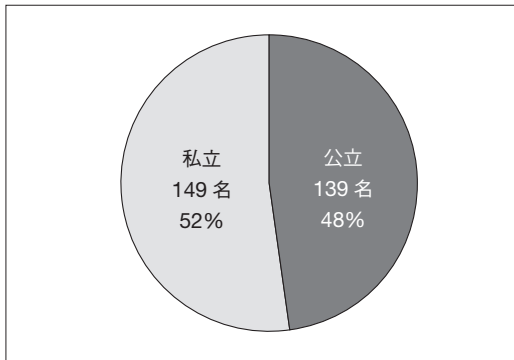
288名の調査協力者における性別、年齢、学校種類の状況はそれぞれ図1~図3に示したとおりである。教員経験年数の平均は16.3年である。



▶ 図1: 性別



▶ 図2: 年齢



▶ 図 3：学校種別

## 4 結果

### 4.1 RQ1 に対する結果

NS への意識と NNS への意識が異なるか調べるため、質問項目の中で 6 項目からなる 3 つの対応ペアの質問を設定した。1 点目は、教師自身が英語でコミュニケーションを行う際に「(項目 1) 英語の NS と話が通じること」「(項目 2) 英語の NNS と話が通じること」をそれぞれどのくらい重要視するかという問いであった。2 点目は、生徒に英語を教える際に「(項目 11) NS と意思疎通が図れるような英語力を養成すること」「(項目 12) NNS と意思疎通が図れるような英語力を養成すること」をどれほど重要とするかという質問、3 点目は「(項目 45) NS と英語でやりとりをすることに関心がある」「(項目 46) 英語で NNS とやりとりをすることに関心がある」という自身の興味・関心を問うものであった。項目 1, 11, 45 から構成される尺度を『NS への意識』とし、項目 2, 12, 46 から構成される尺度を『NNS への意識』として、信頼性を検討するためにクロンバック  $\alpha$  係数を算出した。その結果、『NS への意識』が  $\alpha = .78$ 、『NNS への意識』が  $\alpha = .75$  で、内的整合性のある程度確認できたため、次に t 検定を用いて差の検証を行った。その結果、 $t(288) = 6.98$ 、 $p < .001$  で、『NS への意識』が『NNS への意識』に比べて有意に高いことがわかった。

### 4.2 RQ2 に対する結果

英語観の傾向を検証するために、探索的因子分析を行うこととした。まず、全 57 項目の平均値、標準偏差値を算出し、得点分布を確認した。いくつかの

項目で得点の偏りが見られたが、いずれの項目も英語観の傾向を把握する上で重要な内容が包含されていると判断し、すべての項目を以降の分析の対象とした。次に、主因子法による因子分析を行い、固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮し、6 因子を採用するのが妥当であると考えた。十分な因子負荷量を示さなかった項目を分析から削除し、再度主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。最終的な因子パターンと因子間相関は表 1 に示すとおりである。第 1 因子は、英語でコミュニケーションを行う際の文法、語彙、発音等の正確さと流暢さを重視するという 5 項目から構成されていることから、「規範主義的志向」と名づけた。第 2 因子は、英語の語彙や表現、英米文学を含む英語圏の文化、および世界の文化への関心にかかわる項目からなるため、「文化的関心」と命名した。第 3 因子は、英語学習の成功体験や、NS および NNS との英語でのやりとりの成功体験とそれに伴ったコミュニケーションへの関心に関する項目を含むことから「コミュニケーションへの関心と成功体験」と名づけた。第 4 因子は、英語の文法・語彙・音声等への興味と、日本語と対照比較した際の英語の言語学的魅力という項目で構成されていることから「言語学的関心」とした。第 5 因子は、生徒に教える際に重視する事項として、NS や NNS と意思疎通が図れる英語力を養成することや、社会に出て役立ち、意見を発信できるようにする力の育成をすることといった項目を含んでいるため、「実用志向」と名づけた。最後に第 6 因子は、英語教育で重視することとして、リスニング力、リーディング力、および正確な文法と豊富な語彙の習得といった項目を含むことから「知識志向」と命名した。

各因子を構成する項目間の内的整合性を検討するため、クロンバック  $\alpha$  係数の算出を行った。結果は表 1 内に示すとおりである。いずれも十分な数値であった。

また、6 つの因子の相関係数を同様に表 1 に表した。40 以上の相関を示すのは、「規範主義的志向」と「文化的関心」、「規範主義的志向」と「知識志向」、「文化的関心」と「コミュニケーションへの関心と成功体験」、「文化的関心」と「実用志向」、「コミュニケーションへの関心と成功体験」と「言語学的関心」、「コミュニケーションへの関心と成功体験」と「実用志向」である。

■ 表 1 : 「英語観」の因子分析結果 (プロマックス回転後の因子パターン)

	I	II	III	IV	V	VI
<b>I. (第1因子) 規範主義的志向 (<math>\alpha = .84</math>)</b>						
4. (自分が英語でコミュニケーションを行う際に重要なのは) 正しい文法で話すこと	0.89	-0.10	0.04	0.00	0.05	-0.02
5. (自分が英語でコミュニケーションを行う際に重要なのは) 流暢に話すこと	0.87	-0.07	-0.08	-0.03	0.02	-0.05
7. (自分が英語でコミュニケーションを行う際に重要なのは) 豊富な語彙を使用すること	0.78	0.05	-0.05	-0.05	0.04	-0.15
6. (自分が英語でコミュニケーションを行う際に重要なのは) ネイティブスピーカーに近い発音で話すこと	0.68	-0.06	-0.02	-0.04	-0.06	0.00
24. (生徒に教える際に重要なのは) 書くときも話す時も、正しい文法・語彙を使えるようにすること	0.49	0.08	-0.01	0.06	-0.03	0.33
<b>II. (第2因子) 文化的関心 (<math>\alpha = .84</math>)</b>						
16. (生徒に教える際に重要なのは) 英語を通じて世界各国の文化に興味を持たせること	-0.09	0.87	-0.05	0.00	0.04	0.11
15. (生徒に教える際に重要なのは) 英語圏の国々の文化に興味を持たせること	-0.09	0.82	0.03	0.03	-0.09	0.10
43. (自身の興味・関心として) 英語圏の文化に関心がある	0.03	0.61	0.12	-0.04	-0.10	-0.15
14. (生徒に教える際に重要なのは) 英語の語彙や表現に興味を持たせること	0.08	0.50	0.07	0.24	-0.07	0.16
44. (自身の興味・関心として) 英米文学に関心がある	0.05	0.45	-0.05	0.09	0.05	-0.08
<b>III. (第3因子) コミュニケーションへの関心と成功体験 (<math>\alpha = .83</math>)</b>						
35. (自身のこれまでの経験として) ネイティブスピーカーとやりとりをして通じてうれしかった経験がある	-0.09	-0.15	0.82	0.13	-0.01	0.10
36. (自身のこれまでの経験として) ノンネイティブスピーカーとやりとりをして通じてうれしかった経験がある	-0.09	0.00	0.70	0.03	-0.07	0.04
45. (自身の興味・関心として) ネイティブスピーカーと英語でやりとりをすることに関心がある	-0.02	0.26	0.68	-0.09	0.06	-0.17
46. (自身の興味・関心として) 英語でノンネイティブスピーカーとやりとりをすることに関心がある	0.03	0.34	0.62	-0.16	0.07	-0.14
37. (自身のこれまでの経験として) 英語の学習をしていて、難しい問題が解け、うれしかった経験がある	0.06	-0.09	0.47	0.12	-0.07	0.12
<b>IV. (第4因子) 言語学的関心 (<math>\alpha = .81</math>)</b>						
42. (自身の興味・関心として) 英語の文法に関心がある	-0.04	-0.10	-0.01	0.85	0.02	0.00
40. (自身の興味・関心として) 英語の語彙や表現に関心がある	-0.05	0.19	0.01	0.74	0.05	-0.01
41. (自身の興味・関心として) 英語の音声・発音に関心がある	-0.02	0.17	-0.06	0.65	0.04	-0.12
38. (自身のこれまでの経験として) 英語の学習をしていて、日本語にはない面白い表現や興味深い文章に出会った経験がある	0.05	-0.04	0.36	0.47	-0.02	0.02
<b>V. (第5因子) 実用志向 (<math>\alpha = .80</math>)</b>						
11. (生徒に教える際に重要なのは) ネイティブスピーカーと意思疎通が図れるような英語力を養成すること	0.01	-0.09	0.10	-0.01	0.95	0.06

12.	(生徒に教える際に重要なのは) ノンネイティブスピーカーと意思疎通が図れるような英語力を養成すること	0.08	-0.02	0.06	-0.03	0.81	0.06
10.	(生徒に教える際に重要なのは) 社会に出てからも役立つ英語力を養成すること	-0.04	-0.03	-0.15	0.17	0.68	0.01
13.	(生徒に教える際に重要なのは) 日本人として世界の人々に自分の意見を伝えられるようにすること	0.05	0.07	-0.07	-0.03	0.40	0.01
<b>VI. (第6因子) 知識志向 (<math>\alpha = .73</math>)</b>							
20.	(生徒に教える際に重要なのは) リスニング力を養成すること	-0.23	0.05	0.05	0.00	0.10	0.75
19.	(生徒に教える際に重要なのは) リーディング力を養成すること	-0.04	-0.02	-0.08	-0.03	0.08	0.75
23.	(生徒に教える際に重要なのは) 正確な文法を習得させること	0.25	-0.01	0.05	0.00	-0.15	0.55
21.	(生徒に教える際に重要なのは) できるだけ多くの語彙を習得させること	0.12	0.31	-0.03	-0.04	0.04	0.40
	<b>因子相関</b>	<b>I</b>	<b>II</b>	<b>III</b>	<b>IV</b>	<b>V</b>	<b>VI</b>
	<b>I</b>	—	0.46	0.36	0.37	0.33	0.42
	<b>II</b>		—	0.53	0.33	0.41	0.38
	<b>III</b>			—	0.43	0.42	0.27
	<b>IV</b>				—	0.19	0.30
	<b>V</b>					—	0.34
	<b>VI</b>						—

## 5 考察

4.1の結果より、教師自身が英語でやりとりを行う際にはNNSよりもNSと話が通じることを重視し、生徒に教える際もNSと意思疎通が図れる英語力を意識していることがわかった。さらに、自身の興味・関心という観点からも、NSとのやりとりにより関心があることが明らかになった。

このようにNSへの意識が高い理由と教師の英語観について因子分析結果から考察してみたい。まず、言語教育の観点から避けて通れないのが第1因子の「規範主義的志向」である。「国際語としての英語」は具体的な言語体系が確立していない、いわば抽象的な概念である。言語教育では、教える際に従うある程度の規範が必要であり、それがなければ指導は成り立たない。日本はEFL環境であり、日本英語(Japanese English)が確立しているわけでもないため、NS英語にその規範を求めるのは当然の流れといえ、教師が教える際の指針としてNSを意識していることも説明がつく。しかし、Kubota(1998)は、日本の英語教育は言語使用の規範をアングロ=アメリカン英語に極端に依存しすぎている

という問題点も指摘している。日本の英語教育において、NS規範を完全に排除することは不可能であるが、過度に行き過ぎては知識のみが先行し、相手との相互行為を前提としたコミュニケーションのためのことばという言語習得本来の意味を失ってしまう(行森, 2014)。「国際語としての英語」はその規範主義に歯止めをかけるために有効な概念であると考えられないだろうか。日本で英語を教える者、学ぶ者の意識の中に、英語は自分たちの言語でもあるという更なる自信が存在するようになることが重要であると考えられる。

次に、この「規範主義的志向」に 관련된 因子として、第2因子の「文化的関心」を考えていきたい。目標言語の習得のためには、その言語の話者の文化や思考方法を知り、肯定的かつ好意的な態度を有することが効果的であるとされてきた。実際に、1951年の学習指導要領(試案)(p.37)では「英語を常用語としている人々、特にその生活様式・風俗および習慣について、理解・鑑賞および好ましい態度を発達させること」と記載されていた。現在では英米文化のみではなく、国際文化理解の意識が重視されているが、かつては英語の検定教科書の内容は英米文化を中心としたものが多く偏りが見られた(中

川, 2011)。第4因子の「言語学的関心」も、英語圏の文化的背景からくる特有の表現や語彙への興味といった項目を含んでおり、英語のNSが有する文化への関心が表れている。

次に、第3因子の「コミュニケーションへの関心と成功体験」についてであるが、これは英語でのやりとりができたという自身のこれまでの成功体験や英語学習での成功経験であり、文化的関心や言語学的関心とともに、英語教師を志し、仕事を続けている理由として説得力のあるものである。

最後に、第5因子の「実用志向」と第6因子の「知識志向」を見てみたい。この2つは「コミュニケーション力育成を重視した教育」と「知識を重視した教育」ととらえることができる。多くの先生方の信条として、これらの概念が両方とも共存しているように、二項対立の構造ではなく、互いにバランスを取り合いながら融合すべきものなのであろう。これがどちらか両極端に進んでしまうアンバランスさに問題がある。自由記述では40代男性教諭が以下のような回答をしていた。「グローバル化の名のもとに素人的な薄っぺらい実用英語が強調されるのが恐ろしい。本当に英語ができるということは、正確かつ流暢に、読み書き聞き話すことができることであり、それをめざしたい。授業で production が重要とされるようだが、丁寧に読む、書くことも大切であると考える」。実用英語が単なる英会話レベルととらえられてしまうことへの問題提起をし、規範主義的知識やこれまでの読み書き重視の教育が極端に軽視されることを危惧している。

また、英語の国際語としての実用性が、実利主義と結びつき、即戦力を求めるグローバル企業の要求と相まって、学校の英語教育が職業訓練の場へとシフトしてしまうことを問題視する意見も見られた。これは「国際語としての英語」が内包する負のイメージのひとつなのであろう。別の40代男性教諭は自由記述回答で、「英語は単なるコミュニケーションの道具としてではなく、学校教育において社会や人間に対する理解を深める人間形成のための一教科であってほしい」と述べている。「英語＝コミュニケーションの道具」という図式は英語教育においてコミュニケーション力が重視されるようになってから自明とされる概念である。これは英語に関する知識を蓄積するだけでなく、道具として積極的に使っていくべきだという考えからくるものである。今回

の調査でも質問項目47「英語はコミュニケーションの道具として便利なものである」の平均値は4.70と高く、項目1「英語のネイティブスピーカーと話を通じること（を重要だと思う）」と項目8「自分の考えや感情をきちんと表現すること（を重要だと思う）」の各4.72に次いで高い数値であった。しかし、自分の考えや感情を表現し、互いに理解を深めながら真のコミュニケーションを図るためには、英語は単なる道具以上の役割を担うことが求められているのではないだろうか。

これからは、小学校英語の必修化によって、さらに生活としての英語、コミュニケーションのための英語という意識が強まっていくことが予想される。30代女性教諭は以下のように記述している。「昔はどちらかというと、英語そのものを楽しんでいると思って学んでいたが、今は自分の主張や物事に対する考え方など、しっかり英語を使って伝えられないと英語の役割を果たせないようになってきているように思う。その分、教員にも求められるものが変わってきているけれど、正直どう対応していくのがいいかわからないです。授業を英語にしたり、生徒同士のコミュニケーションを入れることが、果たして世の中に通用することなのか。いろいろと迷ってばかりの授業をしています」。英語教育改革期における現場の苦闘がここに表れている。

## 6

### 結論と今後の課題

調査協力者である先生方は、英語でのコミュニケーション実践においてNSにより強い意識を置いていることがわかったが、その理由として、規範主義や英語圏への文化的関心、英語への言語学的関心、および英語教育の知識志向が英語観として存在していることが明らかになった。また、英語観の中には実用志向も存在しており、近年の流れであるコミュニケーション力育成を目標とした英語教育が念頭に置かれていることもわかった。ただ、自由記述回答の中で、実用性やコミュニケーション力を重視する傾向が過度に進むことへの懸念も見られ、学校という場における英語教育のあり方を問うものもあった。そのような立場からすると、NNSとして、NSだけではなく、より広くNNSとのコミュニケーションをも意識した「国際語としての英語」という

概念は、實用主義を単に強化するものとしてとらえられる可能性がある。しかし、現在の日本の学校英語教育が、これからの社会を生きる生徒たちの人間形成の一教育として真に機能するためには、やはりコミュニケーション実践に必要な能力育成も不可欠であり、いずれかの方向に偏重しすぎないことが重要であると思われる。次々と行われる英語教育改革の中、日本の英語教育における「国際語としての英語」が果たす役割についての再考が求められているのではないだろうか。

最後に、本研究の問題点について述べたい。英語教師の英語観は、個人の経験や環境、社会的要因や時代背景などがからみ合って形成されているものである。本調査では質問紙を用いた量的調査を行い、その概観をとらえたが、複雑化した英語観の諸相を

より深く分析するには、インタビュー調査などを用いた詳細な記述が必要であると思われる。

## 謝 辞

本調査の機会を与えてくださいました公益財団法人日本英語検定協会の皆様、選考委員の先生方、特に本論文作成にあたりご指導くださった小池生夫先生に深く感謝申し上げます。また、立教大学大学院の平賀正子先生には親身になってご指導いただきましたことを厚く御礼申し上げます。最後に、ご多忙の中、貴重なお時間をいただきまして本調査に快くご協力くださった先生方に心より御礼を申し上げます。先生方のますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

## 参考文献 (\*は引用文献)

- \* Chiba, R., Matsuura, H., & Yamamoto, A. (1995). Japanese attitude toward English accents. *World Englishes*, 14(1), pp.77-86.
- Cook, V. (1999). Going beyond the native speaker in language teaching. *TESOL Quarterly*, 33(2), pp.185-209.
- Crystal, D. (2003). *English as a global language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- D'Angelo, J.F. (2008). The Japan context and the expanding circle: A Kachruvian response to Debbie Ho. *Asian Englishes*, 11(2), pp. 64-74.
- \* 花元宏城. (2010). 「英語変種に対する日本人大学生の言語態度について：matched-guise 技法を用いた調査」. 『アジア英語研究』第12号, 21-37. 日本「アジア英語」学会.
- \* 日野信行. (2001). 「国際英語の多様性と英語教育」. 『言語文化研究』第27号, 261-283. 大阪大学言語文化部言語文化研究科.
- Hino, N. (2012). Endonormative models of EIL for the expanding circle. In A. Matsuda (Ed.), *Principles and practices of teaching English as an international language*, pp.28-43. Bristol, UK: Multilingual Matters.
- \* Jenkins, J. (2007). *English as a lingua franca: Attitude and identity*. Oxford: Oxford University Press.
- Kachru, B.B. (1982). Models for non-native Englishes. In B. Kachru (Ed.), *The other tongue: English across cultures*, pp.31-57. Urbana, IL: University of Illinois Press.
- Kachru, B.B. (2005). *Asian Englishes: Beyond the canon*. Hong Kong: Hong Kong University Press.
- \* Kindsvatter, R., Wilen, W., & Ishler, M. (1988). *Dynamics of effective teaching*. NY: Longman.
- \* Kubota, R. (1998). Ideologies of English in Japan. *World Englishes*, 17(3), pp.295-306.
- \* Matsuda, A. (2003). The ownership of English in Japanese secondary schools. *World Englishes*, 22(4), pp.483-496.
- Medgyes, P. (2001). When the teacher is a non-native speaker. In M. Calce-Murcia (Ed.), *Teaching English as a second or foreign language*, pp.429-442. Boston: Heinle & Heinle.
- Milroy, J., & Milroy, L. (1999). *Authority in language: Investigating standard English*. London: Routledge.
- \* Mimatsu, T. (2011). ELF versus EFL: Teaching English for international understanding in Japan. In A. Archibald, A. Cogo & J. Jenkins (Eds.), *Latest trends in ELF research*, pp.251-267. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing.
- 文部省. (1951). 『中学校高等学校 学習指導要領 外国語科英語編 (試案) I・II・III』.
- 仲潔 (2006). 「生きた英語」と分裂的言語観—「学習指導要領」に見る母語話者至上主義と英語の多様性」. 『社会言語学』第6巻, 19-43. 『社会言語学』刊行会.
- \* 中川洋子. (2011). 「高校英語教科書に見られる日本人の英語観の一考察」. 『アジア英語研究』第13号, 39-62. 日本「アジア英語」学会.
- \* 笹島茂・ボーグ, S. (2009). 『言語教師認知の研究』. 東京：開拓社.
- Seargeant, P. (2009). *The idea of English in Japan: Ideology and the evolution of a global language*. Philadelphia: Multilingual Matters.
- Seidlhofer, B. (2005). Key concepts in ELT: English as a lingua franca. *ELT Journal*, 59(4), pp.339-341.
- Smith, L. (1983). *Readings in English as an international language*. Oxford: Pergamon.
- \* Tanaka, F. (2010). A survey-based study of Japanese university student attitudes toward EIL and implications for the future of English education in

Japan. *Asian Englishes*, 13(1), pp.48-71.  
 Timmis, I. (2002). Native-speaker norms and international English: A classroom view. *ELT Journal*, 56(3), pp.240-249.

\*行森まさみ.(2014).「ライフストーリーを通してみる日本人英語教師の英語観の形成」.『アジア英語研究』第16号, 81-100. 日本「アジア」英語学会.

資 料 .....

アンケート質問紙項目と平均値

【A】あなたが英語でコミュニケーションを行う際に、以下のことをそれぞれどのくらい重要だと思いますか。

1. 全く重要だと思わない	2. あまり重要だと思わない	3. どちらとも言えない
4. どちらかというくらい重要だと思う	5. とても重要だと思う	

	平均値
1. 英語のネイティブスピーカーと話を通じること	4.72
2. 英語のノンネイティブスピーカー（非母語話者）と話を通じること	4.55
3. ノンネイティブスピーカーの発音を聞き取れること	4.18
4. 正しい文法で話すこと	3.68
5. 流暢に話すこと	3.32
6. ネイティブスピーカーに近い発音で話すこと	3.34
7. 豊富な語彙を使用すること	3.44
8. 自分の考えや感情をきちんと表現すること	4.72

【B】あなたが生徒に英語を教える際に、以下のことをそれぞれどのくらい重要だと思いますか。

	平均値
9. 大学受験に対応できる英語力を養成すること	4.44
10. 社会に出てからも役立つ英語力を養成すること	4.44
11. ネイティブスピーカーと意思疎通が図れるような英語力を養成すること	4.35
12. ノンネイティブスピーカー（非母語話者）と意思疎通が図れるような英語力を養成すること	4.22
13. 日本人として世界の人々に自分の意見を伝えられるようにすること	4.38
14. 英語の語彙や表現に興味を持たせること	4.29
15. 英語圏の国々の文化に興味を持たせること	4.32
16. 英語を通じて世界各国の文化に興味を持たせること	4.38
17. 英語学習を通じて、コツコツ努力をする姿勢を身につけさせること	4.20
18. 自分自身（教師）が英語で授業を行うこと	3.60
19. リーディング力を養成すること	4.49
20. リスニング力を養成すること	4.50
21. できるだけ多くの語彙を習得させること	4.19
22. できるだけネイティブスピーカーに近い発音を身につけさせること	3.56
23. 正確な文法を習得させること	4.11
24. 書くときも話すときも、正しい文法・語彙を使えるようにすること	3.83
25. ネイティブスピーカーとやりとりする機会をできるだけ多く与えること	4.16
26. ネイティブスピーカーに限らず、日本人教師や生徒同士で英語のやりとりをする機会を多く取り入れること	4.11
27. 実際に英語を話すことを想定したロールプレイやゲームを多く取り入れること	3.79



【C】あなたのこれまでの経験について、以下のことはどの程度当てはまりますか。

1. 全く当てはまらない	2. あまり当てはまらない	3. どちらとも言えない
4. どちらかという当てはまる	5. よく当てはまる	

	平均値
28. 中学時代、または高校時代は英語が好きだった	4.25
29. 中学時代、または高校時代は英語が得意な方だった	4.19
30. 中学時代、または高校時代に受けた英語の授業は興味が持てるものだった	3.32
31. 中学時代、または高校時代に受けた英語の授業はコミュニケーションを重視したのもあり、楽しかった	2.09
32. 現在の英語力は努力の結果だと思う	4.11
33. 学生時代の英語の学習時に、刺激を受けた友人がいる	3.16
34. 今の教師としての自分は、学生時代に英語を教わった先生からの影響を強く受けていると思う	3.33
35. ネイティブスピーカーとやりとりをして通じてうれしかった経験がある	4.42
36. ノンネイティブスピーカー（非母語話者）とやりとりをして通じてうれしかった経験がある	4.11
37. 英語の学習をしていて、難しい問題が解け、うれしかった経験がある	4.08
38. 英語の学習をしていて、日本語にはない面白い表現や興味深い文章に出会った経験がある	4.52
39. 英語の文章を書くのが楽しいと思ったことがある	4.00

【D】あなたの英語に対する興味・関心について、以下のことはどの程度当てはまりますか。

	平均値
40. 英語の語彙や表現に関心がある	4.42
41. 英語の音声・発音に関心がある	4.16
42. 英語の文法に関心がある	4.19
43. 英語圏の文化に関心がある	4.39
44. 英米文学に関心がある	3.53
45. ネイティブスピーカーと英語でやりとりをすることに関心がある	4.30
46. 英語でノンネイティブスピーカー（非母語話者）とやりとりをすることに関心がある	4.05

【E】あなたの英語（英語教育を含む）に対する意識について、以下のことはどの程度当てはまりますか。

	平均値
47. 英語はコミュニケーションの道具として便利なものである	4.70
48. 英語は自分の思考や人となりを表すことができる言葉である	3.96
49. ネイティブスピーカーは国際政治経済または個人レベルのやりとりにおいて、ノンネイティブスピーカーより優位だと感じる	3.67
50. 日本人は国際社会でネイティブスピーカーのように英語を話すことが求められていると思う	3.20
51. 日本人が英語を話すときに、語彙が限られていたり文法が違っていたりすると教養がない感じがする	2.93
52. 日本人が日本語の影響を強く受けた英語で話をしていても、相手に通じるのであればそれでよいと思う	3.97
53. 日本人英語教師でも、英語の発音はなるべくネイティブスピーカーに近い方がよい	4.01
54. 日本人英語教師が英語で話す姿は生徒の手本になる	4.39
55. ネイティブスピーカーと英語で話すことについて不安がある	3.11
56. 英語で授業を行うことについて不安がある	3.27
57. 英語はコツコツと勉強して身につくものである	4.40

【F】グローバル化に伴って、英語は国際語としての性質を持つようになってきました。「国際語としての英語」について、あなたのお考えをお聞かせください。（自由記述）